

有間皇子をめぐる歌群の形成と紀伊国行幸

駒 木 敏

はじめに

万葉集の有間皇子に関係する歌は、大きく二つの流れにまとめられる。一つは、次節に〈Ⅰ有間皇子関係歌群〉として示した、巻二の挽歌部に収める六首の一連である。もう一つは、二節に示した〈Ⅱ持統四年の紀伊行幸歌〉、及び三節に示した〈Ⅲ大宝元年の紀伊国行幸歌〉のそれぞれの歌群であり、その中にいくつかが有間皇子歌を踏まえた歌が存在する。

端的にいえば、Ⅰは有間皇子の辞世歌とそれに続く追悼歌群（挽歌）として、Ⅱはその時々々の行幸歌群（雑歌）として、集中ではそれぞれに異なった歌のあり方を持たされている。しかし、二つの流れについて有間皇子歌を媒介項にして検討していくと、それらはある部分で緊密に関連していることが知られる。

まず前者は、「事件」の当事者たる有間皇子の歌と、皇子の歌に関わりながらその悲劇を共有し、悲嘆する内容の歌群である。巻二の編集者が有間皇子の歌とそれに関係する歌を一連に並べて、皇子に対する追慕の思いを主題とする歌群を構成したのである。有間皇子以外の歌は、すべて後世の人たちの歌である。万葉集では、ある人の歌に時間を隔てて追和するという形式があるが、今の場合のように、過去のある人の歌を想起し、後の時代の人たちが、数次にわたりそれに和している現象は珍しい。有間皇子事件——皇子が謀反の罪に問われ、紀伊路に松を結んで祈りの歌を歌い、短い生涯を閉じたこと——は、数十年の後までも語り継がれていたことになる。

本稿は、巻二の歌を中心に据えて、他の巻の関係歌も関連させつつ、有間皇子関係の歌群の内実の一端を考察することにする。

一 有間皇子関係の歌群

初めに、巻二「挽歌」部冒頭の有間皇子の歌をめぐる一群（有間皇子関係歌群）をあげ、全体を確認しておこう（記号は便宜のためにした）。

（I）有間皇子関係歌群（巻二）

(a) 有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

① 磐代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへり
見む（二・一四一）

② 家にあれば 筈に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に
盛る（二・一四二）

(b) 長忌寸意吉麻呂、結び松を見て哀しび咽ふ歌二首

③ 磐代の 崖の松が枝 結びけむ 人はかへりて また見けむ
かも（二・一四三）

④ 磐代の 野中に立てる 結び松 心も解けず 古思ほゆ
（未詳）（二・一四四）

⑤ 山上臣憶良の追和する歌一首
翼なす あり通ひつつ 見らめども 人こそ知らね 松は
知るらむ（二・一四五）

右の件の歌どもは、柩を挽く時に作る所にあらずと

有間皇子をめぐる歌群の形成と紀伊国行幸

(c) いへども、歌の意を准擬す。故以に挽歌の類に載す。
大宝元年辛丑、紀伊国に幸す時に、結び松を見る歌一
首（楠本朝臣人麻呂の歌集の中に出づ）

⑥ 後見むと 君が結べる 磐代の 小松がうれを また見けむ
かも（二・一四六）

歌群は、(a)有間皇子の歌、(b)意吉麻呂の歌と憶良の歌、(c)人麻呂歌集の歌の三つの要素に分けられる。つまり、最初に斉明朝に歌われた有間皇子の歌があり、その後、長意吉麻呂が有間を偲ぶ歌を歌って憶良がそれに自らの思いを和し、最後は人麻呂歌集の歌（⑥）が人麻呂歌集に属するものかどうかについては、四節で触れるように、問題を残す。この点をも含めて、以下本稿では（歌集歌）と表記することがある）が大宝年間に、同じように有間への思いを歌った、これが歌群の示す世界である。

冒頭の有間皇子の歌は「自傷歌」、つまり辞世歌であり、斉明四年に謀叛のことを告発され、紀伊国に送られる道中の歌である。①には「磐代」（和歌山県日高郡南部町岩代）の地名が詠まれている。ほぼ同時期のものと思われる中皇命の歌（左注の『類聚歌林』では斉明天皇歌）にも「君が代も我が代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな」（一・一〇）とあり、やはり磐代の岡に草を結び生命の無事を祈る歌がある。磐代は印南側からは切目山を越えて海岸にで

た所（南部側からは時に差しかかる所）で、旅の安全を祈る神聖な場所であったと推定される（後の熊野街道の要衝でもある）。有間皇子の①は、一応旅中にあつて生命の無事を祈願する歌と理解される。ただ、すでに指摘があるように、「またかへり見む」の類型句をもつ歌のなかで、「真幸くあらば」またかへり見む」という条件法の表現は類型からは突出している^①。また「幸く」と願望する言葉（歌）は「始めは自然や人事の双方にわたつて」使用されるものであつたが、「真幸くあらば」という仮定で表されるところに暗さが感じられ、そこに「皇子の心の亀裂があり悲劇がある」といわれる。そこに題詞において「自傷」とされる、この歌の実質があろう。

次の②は、旅の不自由を託つ歌であろう。一説に「椎の葉に盛る」「飯」は神への供えを意味し、これは旅先での身の安全を祈願する歌だという解釈もあるが、状況にはそぐわないといわれる通りで、「家」と「旅」とを対比して、旅先における食事の不便（つまりは旅の辛さ）を嘆いた歌と解される。構成における「旅と家の対比」という発想の枠組みは明確であり、基本は典型的な旅の歌と捉えられる。

さて、有間の歌には自作か他作（仮託）かという問題がある。自作とすることへの疑いは謀叛を告発され逮捕され、慌しく都から「紀の温湯（牟婁の温湯）」まで護送される状況——十月九日に護送

され、訊問を受けて藤白坂（海南市藤白）に処刑されたのは十一日——の中で、歌を詠む時間的、心理的余裕はなかつたであろうとする立場からの提言である^⑤。そこで主張されるのが仮託論で、折口信夫^⑥の論がある。いま本稿はこの論議に関わらず、皇子の歌として考察してゆく。ここでは、それが仮託であつたとしても、皇子の死後そう時間をおかずに形成されたであろうと想定しておこう。後で触れるように、三十二年後の持統四年には有間を追悼、追慕する歌が存在している。そして、「有間皇子の歌」への共通の理解があれば、後人がゆかりの場所では有間歌を踏まえた追慕の歌を構想することはできない。

このようになお問題は残されているが、有間皇子の「磐代」における二首は、罪人として「死」に向かう有間の紀伊への旅と結びついて歌われ、皇子の悲劇を伝えるものとして受容されていたと考えることができるといえる。

また、「自傷歌」は二首なのであるが、後に有間皇子の辞世歌が問題にされるときには、もっぱら「磐代の」「浜松が枝を引き結び」とある第一首目であるという意識も、早い時期から定着していたようである。

二一(一) 持統天皇四年の紀伊行幸歌

一有間皇子を追悼する歌は、卷二の歌群のほかにも存在する。そのうち、持統四年の紀伊国行幸の歌は、卷二歌群との直接関係はもないが、有間皇子追悼歌群の始発をなすものである。

まず持統朝の紀伊行幸は、持統天皇四年(990)の九月十三日(二十四日の十一日間である。当年の一月には持統天皇(鸕野讚良皇女)が即位している。この行幸は『統紀』によれば「紀伊を巡行むとす」(九月十一日条)とあり、目的地は定かでないけれども、次に掲げる川嶋皇子の歌によれば、有間皇子にゆかりの「浜松の木」が詠み込まれているから、「磐代」(日高郡南部町岩代)を通っているのは確実である。万葉歌によって、その目的地は紀の温湯であったことが傍証される。関連する歌を挙げよう。

Ⅱ 持統四年の紀伊国行幸歌(卷二)

紀伊国に幸す時に、川嶋皇子の作らず歌(或は云はく、山上臣憶良の作なりといふ)

- ① 白波の 浜松が枝の 手向けくさ 幾代までにか 年の経ぬらむ(年は経にけむ)(一・三四)

日本紀に曰く、「朱鳥四年庚寅の秋九月、天皇紀伊国に幸す」といふ。

有間皇子をめぐる歌群の形成と紀伊国行幸

勢能山を越ゆる時に、阿閉皇女の作らず歌

- ② これやこの 倭にしては 我が恋ふる 紀路にありといふ

名に負ふ背の山(一・三五)

さて①は、題詞に「川嶋皇子の作らず歌」としながら、注記に「山上臣憶良の作なり」の異伝を記している。さらには卷九(一七一六番)に次のような形で重出歌が載せられている。

山上の歌

- ① 白波の 浜松の木の 手向けくさ 幾代までにか 年は経ぬらむ

右の一首、或は云はく、川嶋皇子の御作歌なりといふ。

卷九では、題詞に「山上の歌」とし、左注に「或は曰く『川嶋皇子の御作歌なり』といふ」と記し、作者については卷一と逆の所伝を示している。また表現にもいくつかの相違があり、小異ながら輻輳した異伝をもっている。諸注が指摘するように、同じ歌が別ルートを経て定着したものであろう。作者については、歌の実質的作者と形式的作者の関係を反映した表記であり、実質的には川嶋皇子の意向を体して憶良が制作したのであろう。集団の共有性をもつ前期万葉の歌にはよく見られる特徴である。(以下、この歌については「川嶋Ⅱ憶良歌」と表記する場合がある)。

ただしこの歌は、「白波の」(次句「浜松」を意識した枕詞的修

辭)打ち寄せる海浜の松の木に幣が供えられていることを歌うのであり、背景がわからなければ、単なる回想の歌と受け取られかねない。これを持統四年の行幸時の歌とすることについては、行幸の行程や目的地が定かでないことや、残された歌にも手がかりとなる地名がないことなどから、「磐代」での有間歌を回顧した歌とすることに否定的な見解もある。けれども、これを有間の①の「磐代の浜松が枝を引き結び」と重ねるときに、それは皇子の結んだ松であることになろう。中西進氏が「浜松が枝」の表現について、「他ならぬ有間皇子の用語である」として有間歌との対応を指摘されたことが想起される。こうして、「幾代までにか年の経ぬらむ(年は経にけむ)」の表現は、皇子が松を結んで折った時から今に至る時間の経過を指している。そして、時間の経過は「手向けくさ」を対象にしているのであるから、手向けはその死を悼んでの供え物を用いていることになる。磐代が旅の安全を祈る場所であったとすると、「手向けくさ」はこの地の松の木に道行く人が捧げ続けたきた幣と理解することも可能であるが、「浜松が枝の」という修飾句が付いている以上、有間にゆかりの「松の木」に捧げられた幣とするのが自然な解である。ポイントは「浜松が枝」ということになる。

こう考えてくると、この(川嶋≡憶良歌)には、有間の自傷歌とその詠じられた場とが、むしろ意識的に踏まえられていた見てよい。

ここに、「(引き結ばれた)浜松が枝」をキーワードとして皇子を偲んでゆく以後の歌の方向が決定されたのである。

さらに、(川嶋≡憶良歌)の伝来については興味深い現象もある。巻一(三四番)と巻九(二七二六番)とでは作者異伝のみならず、先にも触れた表現(助詞・助動詞の用法)の面での微妙な異なりがある。

本文 白波の浜松が枝の手向けくさ幾代までにか年の経ぬらむ

〔之枝乃〕 〔年乃経去良武〕

異伝(一) 白波の浜松が枝の手向けくさ幾代までにか年は経にけむ

〔年者経尔計武〕

異伝(二) 白波の浜松の木の手向けくさ幾代までにか年は経ぬらむ

〔之木乃〕 〔年薄経濫〕

三通りの表現(表記)があることになる。口承の方法による伝誦の過程が三つの異なりとなり、それが資料のルートの違いによつて、表記に定着したのであろう。見方を変えると、この歌は当時(持統朝)の宮廷社会において広く知られ、定着していたということでもある。

持統四年の行幸時において、三十二年前の有間皇子事件に関連する歌が歌われたこと、ひいてはそれが宮廷社会で広く流布されていたことは、改めて確認しておいてよいと思われる。

二一(二) 阿閉皇女の歌

さて、もう一首は②の「勢能山を越ゆる時に、阿閉皇女の作らす歌」(一・三三五)である。阿閉皇女(天智皇女。元明天皇)は草壁皇太子の妃であり、草壁はこの前年四月十三日に逝去(二十八歳)している。歌は、磐代よりはずっと手前の「背の山(和歌山県伊都郡かつらぎ町)でのものだが、背の山に懸けて夫を思うこの歌には、夫の草壁皇太子を失った妻の嘆きがこめられているとの読みは定着しているといつてよい。「背の山(妹背の山)」を見て、その景物から恋の趣向に転じて興するのは紀伊路を通る歌の一般であるが、今の場合、歌い手にとって夫を亡くしたのが前の年であることに思いをいたせば、歌の裏側に夫への哀惜の念を見るのがむしろ自然であろう。倭にあり夫への追憶の思いにある「我」が、紀伊路に来て、やっと「背(の山)」にまみえることができたといい追憶と解放感との綯い交ぜられたような思いを、口語的諧調のなかで表現した歌と理解される。

ここで考えておきたいのは、持統四年の行幸の歌二首がともに亡き人を回顧する点で共通することである。これは単なる偶然であろうか。この折の歌が二首だけだったのかどうかは分からない。また、そう考えるには、片や「背の山」、片や「(磐代の)浜松の木」と、二つの歌の詠まれた地点はずいぶん距離的に離れている。想像をたくましくすれば、この時の行幸でも、歌が歌われる機会があったのだから、場所や景物の讚美、旅情や望郷の思いなどを含めた多くの歌が詠まれた可能性は否定できない(持統朝の他の行幸では歌が多く歌われている)。つまり、「浜松が枝」に有間を偲び、「背の山」に亡き草壁を偲ぶ二首が並んで記載されている背後には、何らかの意図や必然性が感じられる。歌い手とともに天智天皇の皇子であり(川嶋皇子は天智天皇の第二皇子、阿閉皇女は第四皇女)、歌の主題も松の木や背山などの景物を対象にして、若くして亡くなった皇子たちへの追憶である点で共通しているからである。皇女の歌には、そのような夫を追悼する意図もあったとしてよいだろう。一方の(川嶋)憶良歌も、亡き皇子への追憶の思いに貫かれているのであり、二つは同じ場でのものではないにせよ、奇しくも行幸従駕歌でありながら、悲しい過去への回想、追悼の思いを込めたものとなっている。たまたまそうだったというより、この度の行幸歌の一面として確かめておこう。

三一(一) 大宝元年の紀伊国行幸歌

次は大宝元年の行幸との関係である。実は卷二の有間皇子関係歌群は、憶良の追和歌(b)―⑤)を除いて、すべて大宝時行幸の作

により構成されているようである。三首とも「磐代」での歌である。制作の時点については別の見方もある意吉麻呂の二首と、それに追和した憶良歌の連関から考察をはじめよう。

まず意吉麻呂歌の成立時点については、これらが「大宝元年辛丑」の題詞を伴う歌集歌とは一四五の左注を挟んで分断されているので、大宝時の作とは見られないとの判断もある。とすると残るは持統四年時以外にはなく、橋本達雄、中西進氏などは意吉麻呂歌を持統四年の作とし、ほぼ同時に憶良の追和があったと推測されている。この見解は大宝元年の行幸時に憶良が日本にいなかったことを踏まえ（後述）、憶良の「追和」の時点を早い時期に遡らせようとするのであるが、「追和」は集中の事例に照らしても時間を隔てた場合の歌の方法と見られる（澤瀉『注釈』）から、必ずしも意吉麻呂歌の制作時まで遡らせる必要はない。

一方で、長意吉麻呂の他の歌がほぼ文武朝以後のものであること（稲岡『全注 巻二』）は留意されてよい。これを持統四年とすると、むしろ歌群の他の歌のあり方と抵触してしまうのではないか。つまり、持統四年の行幸の場に従駕していた憶良が川嶋皇子歌の代作をなしつつ、一方で同行者の意吉麻呂歌にも「追和」していたことになる。このあり方は「追和」の方法からして、理解しがたい。のみならず、巻二の有間皇子歌群に（川嶋＝憶良歌）のみが持ち込まれ

ていないこともまた不自然といわざるをえない。

そうすると、巻二の意吉麻呂歌に関しては、大宝元年時の行幸に意吉麻呂が従駕していて、他にも詠歌（巻九・一六七三）をなしている事実が重視されるべきであり、意吉麻呂の歌が大宝元年時のものであることはまず動かないところである。

さて、実際にはこの二首に憶良が追和している。ところが憶良は文武天皇の行幸（大宝元年）の年には遣唐使に任命されている。続紀に遣唐使出発の具体的な日時の記事はないが、一度出航した船が暴風に押し戻され、どうやら待機中であつたらしい¹⁰。そのような状況下では、憶良の行幸への参加はありえない。したがって、意吉麻呂の歌に、憶良の追和の歌が付されたのは、おそらく憶良が中国から帰還して遣唐使の任を終えた後（慶雲元年七月一日以降）のある機会であろう。意吉麻呂が自作の歌を示したのに対して、憶良が追和したという関係が推定される。

これに関して伊藤博氏は、意吉麻呂の歌の文字遣いに『遊仙窟』の強い影響を見て、それは大宝年間の遣唐使により舶来された『遊仙窟』を憶良がいち早く意吉麻呂に示し、意吉麻呂がそれを取り入れて歌作した結果であると想定される。そして、ここの追和についても、憶良が『遊仙窟』を意吉麻呂に示した折に、意吉麻呂の方から憶良にこの歌が示されたのであろうとされる。¹¹ 妥当な推論であり、

首肯されよう。

さて、この行幸で意吉麻呂はもう一首の歌を遺していたのであった。以下の考察のため、その歌を含む歌群全体を揭示する。

〔Ⅲ 大宝元年の紀伊国行幸歌（巻九）〕

大宝元年辛丑の冬十月、太上天皇・大行天皇、紀伊国に幸す

時の歌十三首

- ① 妹がため 我玉求む 沖辺なる 白玉寄せ来 沖つ白波
（九・二六六七）

右の一首、上に見ゆること既に畢りぬ。ただし、歌辞少しく換はり、年代相違ふ。因以りて累ねて載す。

- ② 白崎は 幸く在り待て 大船に ま梶しじ貫き またかへり
見む（同・一六六八）

- ③ 三名部の浦 潮な満ちそね 鹿島なる 釣する海人を見
帰り来む（同・一六六九）

- ④ 朝開き 漕ぎ出て我は 湯羅の崎 釣する海人を見
来て帰る（同・一六七〇）

- ⑤ 湯羅の崎 潮干にけらし 白神の 磯の浦廻を あへて漕ぐ
なり（同・一六七二）

- ⑥ 黒牛潟 潮干の浦を 紅の 玉裳裾引き 行くは誰が妻
（同・一六七三）

有間皇子をめぐる歌群の形成と紀伊国行幸

- ⑦ 風莫の 浜の白波 いたづらに ここに寄せ来る 見る人
しに（同・一六七三）

右の一首、山上憶良の類聚歌林に曰く、長忌寸意吉麻呂、詔に応へてこの歌を作る、といふ。

- ⑧ 我が背子が 使ひ来むかと 出立の この松原を 今日か過
ぎなむ（同・一六七四）

- ⑨ 藤白の み坂を越ゆと 白たへの 我が衣手は 濡れにける
かも（同・一六七五）

- ⑩ 勢能山に 黄葉常敷く 神岡の 山の黄葉は 今日か散るら
む（同・一六七六）

- ⑪ 倭には 聞こえ行かぬか 大我野の 竹葉刈り敷き 慮りせ
りとは（同・一六七七）

- ⑫ 紀伊の国の 昔獵夫の 鳴り矢持ち 鹿取りなびけし 坂の
上にそある（同・一六七八）

- ⑬ 紀伊の国に 止まず通はむ 妻の杜 妻寄しこせね 妻とい
ひながら（一に云ふ、「妻賜はにも 妻といひながら」）（同・
一六七九）

右の一首、或は云はく、坂上忌寸人長の作なりといふ。

右の⑦が意吉麻呂歌である。左注に、憶良の『類聚歌林』に基づく歌事情を伝える。この歌群で作者名が記されるのは、今の意吉

麻呂と⑬の坂上人長だけである。しかも、この二首にのみ「二云」の形で歌詞の異伝が付される点も共通している。⑬歌と『類聚歌林』との関係の有無は不明といわざるをえないが、少なくとも意吉麻呂歌のあり方からすれば、意吉麻呂と憶良との資料の共有性が想定されるであろう。『類聚歌林』を編む際の資料の一つとして、意吉麻呂を通してもたらされた資料の存在が浮かびあがってくるのである。

巻九の行幸歌十三首は、作者名を記さないのが原則であり、一方で、巻二に切り取られたと思われる有間皇子関連の歌には、作者名が明記されるという相違点がある。憶良はこの行幸に関しては事情を知らないわけであるから、先の追和歌の関係を重ねてみても、意吉麻呂の側の資料に基づき「歌林」が記録した可能性が高いと思われる。大宝時の行幸歌群の資料は、その行幸に参加していた意吉麻呂の側にも持ち伝えられ、その資料がある機会に憶良に提供されたという事情が推測される。

このように考えると、大宝年時の意吉麻呂歌と憶良の追和歌の営みには、さらに持続四年時の憶良歌が影を落としていた可能性を見てよいのではあるまいか。意吉麻呂歌と憶良の追和歌の成りたちには、何がしかの交友関係が前提となつていよう。そして憶良の追和の機会が、遣唐使としての渡唐との関係から大宝の行幸よりもすつ

と下るであろうことは先に述べた。いわば、憶良の留守中の出来事を意吉麻呂は報告し、それに憶良が応えたのが追和歌の成立なのであった。そうすると、ここに、二人の交友関係と同時に、有間皇子を追悼する歌を契機とする結びつきの線が浮かびあがる。つまり、意吉麻呂は憶良がかつて有間皇子追悼の歌をものした事実を知っており、自らもその流れに身を置き有間皇子追悼の歌を制作した。婦朝後の憶良に意吉麻呂がこれを示したのは、それが二人の共有の体験だったからであり、憶良も当然これに応えた。追和した憶良の内には、そのような有間皇子追悼歌の流れが強く意識されていてもおかしくない。そして「追和」というあり方はまさに憶良の方法なのである。^⑬

このような資料の同一性（共有性）を手掛かりにすると、皇子の追悼という主題に即してた歌人の交流が想定されてくる。皇子の自傷歌を冒頭に置き、その「結び松」を「見る」ことを通して後人が追悼する一連の緊密な歌群の形成が用意されることになる。

以上が、巻二の有間皇子追悼歌群の中核をなす〈意吉麻呂―憶良〉歌の形成の背景である。

三二二 〈意吉麻呂―憶良〉歌の構成

ここで巻二歌群に即して、一連の表現の内実（あり方）について

整理することにした。

先述のように持統四年の〈川嶋＝憶良歌〉の表現は、有間歌の「結んだ」浜松が枝」をキーワードとして踏襲していた。卷二の〈意吉麻呂・憶良の追和〉もその方向性は同じであり、有間への追悼歌は一貫して「(磐代の) 結び松」が主題となっている。

詳しくいえば、(b)―③が、願望を託して結んだ磐代の松を、その後見ることができたのであろうかという形で、皇子への哀悼の思いを表出していることである(ちなみに、(b)―④(意吉麻呂の二首め)は歌い手の心情表出が主眼となっている)。題詞の表現もその内容に呼応して整えられているかのようである。編集過程には違いがあると思われるものの、このことは、願望を託して結んだ松の木末を再び見たであろうかと皇子への思いをいう、〈歌集歌〉にまで及んで共通する。有間皇子歌を承ける形で、意吉麻呂歌も〈歌集歌〉も、その題詞では「見結松」と記し、対応する歌の表現も、「磐代の崖の松が枝結びけむ人は」(一四三)・「磐代の野中に立てる結び松」(一四四)・「後見むと君が結べる磐代の子松が末を」(一四六)のように、思いを託して結ばれた「結び松」(一四二)を通して皇子を追憶する構成をとっている。憶良の歌のみが、「(結び)松」を対象にしながらも、後世の人の立場から過去の人を思いやるのではなく、「人」には見えないけれども「松」こそは知って

いるとして、靈魂と化した皇子を見続けている(靈魂と交流しあっている)松を主体に歌っている。地名や修飾語を一切介在させないで表現しているが、皇子との関連はやはり「松」を媒介に歌われる。つまり、追悼歌群のキーワード「結び松」を軸に表現は構成されているのであった。

憶良の追和歌について、田中大士氏は「この歌の前後をなす、奥麻呂歌、柿本人麻呂歌集歌が、過去の人として詠む有間皇子を、今も靈として存在していると詠む点、大きく突出している」とする。それは「亡き人との間に長い時間が立ちただかっている嘆き」を歌う同じ憶良の三四番歌(持統四年)との「手法」の違いでもあるとされる。憶良の手法ということもあるかも知れないが、やはり「追和」の歌であること(場を共有していないこと)が一つの理由でもあつたらう。「人はかへりてまた見けむかも」と事件の進行する時間の中にある皇子の行動を推し量り(一四三)、そのゆかりの結び松に心結ばれたままであることを嘆く(一四四)意吉麻呂歌の二首に和しつつ、ゆかりの松との交流を現に続ける靈魂の存在を幻視している。前者が時間的距離の隔たりを強調し嘆く¹⁵のに対して、後者は空間的な世界の隔たりを強調する方向へと転換させるのである。憶良の追和歌は、皇子の靈魂と交感関係にある松の木を想起しながら、現実と幽冥界との隔絶の思いを歌っているとしてよい。死の事

実を通してそこに長い時間を実感しつつも、ゆかりの景物と交流する靈魂の存在を通しては、なお微かな共存の感覚を持っていたのであろうか。憶良、ないしはその時代の靈魂（生命）観念がほの見えているかも知れない。

四 柿本人麻呂歌集の問題

卷二歌群は最後に「人麻呂歌集歌」を置いている。この歌についてはいくつかの問題がある。その一つは題詞の「大宝元年辛丑」のような精緻な書式は人麻呂歌集では異例であることから、題詞の下の小書（「柿本朝臣人麻呂歌集中出也」）の注記はそのまま認められないのではないかという問題である。本文どおり大宝元年のもので「歌集」に属するとの見解が多い中で、肝心なのは稲岡耕二氏の指摘された、第五句の表記のあり方、すなわち「また見けむかも（又將見香聞）」の「將」字を助動詞「けむ」にあてる用字法は、人麻呂歌集及び人麻呂作歌では例をみないという異質さ（不自然さ）が解決されていないことである。本稿では、「歌集」歌であるかどうかはなお課題を残すものの、卷九の大宝時の行幸の一群の歌から取り出されたものであるが、その際に何らかの誤記があったかとする見解に従うことにしたい。

次には、〈歌集歌〉が大宝時の歌とするならば、なぜ同時の意吉

麻呂作歌と卷二において切り離されて収載されているのかに疑問がもたれる。これについての一つの解答は、憶良歌までが第一次の整理段階で、「歌集」歌はその後に増補されたという編集過程の結果とする見解（『釈注 卷二』）である。しかしそれにしても、もともと同じ場で歌われたと推定される意吉麻呂歌と〈歌集歌〉が分断された経緯には、あるいは憶良のこれ以前の歌の存在が大きかったのではないか。すでに触れた「白波の浜松が枝の（の木）」の（川嶋）憶良）歌であり、卷九の「山上歌」（九・一七一六）はその位置からして人麻呂歌集に属すると見られる。実は有間皇子への追悼歌を初めて歌ったのは憶良であり、意吉麻呂はそれを知っているからこそ大宝時の自分の歌を憶良に示したという事情が想定される。そうだとすれば、有間皇子の歌を意識して追憶した意吉麻呂歌があり、さらにそれに和した憶良歌があり、その流れで有間皇子追悼歌群の構成がなされたことは分かりやすい。視点を変えれば、意吉麻呂―憶良ラインによる資料に基づいた歌群のまとまりである。そこに第一次の有間皇子歌群の形成を考察することができよう。この筋道からすると〈歌集歌〉がはみ出すのも、ある意味では自然のなりゆきである。

以上のような次第であるとするなら、〈歌集歌〉はこれらの歌群と共通性をもたないのかといえ、表現（「結び松」を「見る」と

歌う主題）からはむしろ共通性が認められよう。当該歌は、題詞を疑えば持統四年の行幸時のものとも考え得るが、そうすると、意吉麻呂の第一首はあまりに〈歌集歌〉と近似した歌になってしまう。やはり大宝時の行幸、すなわち意吉麻呂歌と同一の場で形成されたものするのがよいであろう。

二首が同じ場で詠まれたことを示す徴証は、共に第五句に「また見けむかも」の同一表現をもつことにも認められる。通常、同一の場で歌われた歌が同じ句を含むことは決して多いとはいえないが、大宝の行幸時の詠歌の特徴に、同一句ないし類似句を含むものが多いことがある。村瀬憲夫氏の指摘によれば、紀伊行幸歌群のなかには次のような類句・類型的表現が見られる。¹⁹⁾

- ③ 三名部の浦潮な満ちそね鹿島なる釣する海人を見て帰り来む
 - ④ 朝開き漕ぎ出て我は湯羅の崎釣する海人を見て帰り来む
 - ⑧ 我が背子が使ひ来むかと出立のこの松原を今日か過ぎなむ
 - ⑩ 勢能山に黄葉常敷く神岡の山の黄葉は今日か散るらむ
- * 後れ居て我が恋ひをれば白雲のたなびく山を今日か越ゆらむ

これらを挙げて村瀬氏は、「このような現象が生じるのは、これらの歌が多くの人々の前で歌われ、広く享受される共通の場があったことを示している」と述べられた。この現象は、同じ行幸の機会にもなされた巻二の有間追悼歌群についてもいえる。意吉麻呂の③と

〈歌集歌〉がともに「また見けむかも」の結句を持つことである。有間皇子追悼歌の一群の中でみると、意吉麻呂歌と歌集歌がともに同一の句を持つことにはやや違和感を覚える。かといって、二首は同一歌というほどに近いわけでもなく、「人は（かへりて）」（意吉麻呂歌）と「君が（結べる）」（歌集歌）という対象に対する把握の仕方の差異も見られる。こうして、むしろ類句を共有する形での集団的詠歌のあり方が想定されてよいとするなら、二首は場を共にする同時の歌と見ることが許されよう。

五 大宝元年行幸と有間皇子追悼歌

前節までにおいて、巻二歌群と大宝時の歌群の場の同一性を想定してきたが、二群の場の同一性については、必ずしも自明のことではない。巻九の行幸歌については、「藤白のみ坂」(⑨)の歌を除き、大かた有間皇子歌と結びつくような歌は見当たらないとされてきた。ところが、見てきたように、巻二の有間皇子歌群中の意吉麻呂歌、〈歌集歌〉は大宝行幸時の作とするほかはない。とすれば、巻二歌群と巻九歌群は、歌の場は同じであっても初めから別々の資料として定着をみたのであろうか。

そこで想起されるのが巻九歌群に有間皇子追憶の歌の存在を指摘する伊藤博氏の論である。伊藤論が「藤白坂」の歌以外にも有間皇

子との関連をもつものとして挙げるのは、まず「白崎は幸く在り待て〜」②の歌である。この歌の「幸く」、「またかへり見む」などについて、「表現が酷似し、趣が通う」点で、有間皇子の自傷歌第一首（一四一）を想起させるとされる。次に、「風莫の〜」⑦の歌をあげて、「見る人なしに」の句が志貴皇子挽歌（二・一三二）などに通じる「挽歌的表現」であるとの判断に立ち、この歌は前歌とのつながりでは「家で待つ妻を指す」のだが、「続く歌のありようによつては有間皇子その人を指すこともあり得る」として、もともとはこの歌の直後に卷二の〈歌集歌〉があつたと推定された（伊藤論は卷九行幸歌群から卷二に切りだされたのは〈歌集歌〉のみと判断されている）。

卷二の有間皇子歌群と大宝時の歌群の関係が論議されず、むしろ関連の言及に慎重であるように思われるのは、〈意吉麻呂―憶良〉歌の制作時点が不確定であることが影響しているであろう。まして、肝心の有間皇子事件はすでに四十三年も以前の出来事である。確かに卷九歌群だけを読んでいる限りでは、そこに有間皇子歌とのつながりが見えにくいといつてよい。しかし問題は、卷二歌群の形成事情を見通すことのできたいま、それらの歌群を卷九歌群に重ねてみると、そこには新たな映像が立ちあがってくるのではなからうか。その点で、伊藤論の指摘はまさに先見的であつたと思う。

ここで、伊藤論が有間皇子の歌との重なりを推断した②の歌について、あえて卷二の歌の類同的な表現に照らしてみると、次のような関係になる。

Ⅲ・② 白崎は幸く在り待て大船にま梶しじ貫きまたかへり見む
「Ⅰ・① 磐代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む」

Ⅰ・③ 磐代の崖の松が枝結びむ人はかへりてまた見けむかも
Ⅰ・⑥ 後見むと君が結べる磐代の小松がうれをまた見けむかも
第五句に呼応する表現をもつ右のような類句関係が見えてくるのである。②の「白崎」歌の歌い手の意図いかんにかかわらず、「またかへり見む」から有間歌の「結び松」が呼び起されるのは必然であるろう。「白崎（日高郡由良町大引）」と磐代は距離的に離れ過ぎてはいるが、この歌群で地名の表われは必ずしも旅程の順序に対応してはいない。②は前半「海浜の歌」の冒頭歌であり、白崎への讚美であるとともに、旅の安全を託す機能をも担っている。その表現は有間皇子の歌と響き合う表現性をもつがゆえに、おそらく磐代の地と結びつく時に、意吉麻呂歌や歌集歌のようなあり方を誘発するのではないだろうか。卷二の歌群の対応（構成）がそのまま卷九の現場で再現されたなどというつもりはない。有間皇子歌が早くに「表現」として存在（確定）している以上、その現場にかかわる行幸の

地で巻九の②が発想されるのは、一つの可能性としての方向である。そして、巻九の②が有間歌を内包しうる表現である以上、これと映発し合って巻二の③・⑤が表現化されるのも、集団的詠歌のあり方として可能な方向である。

現在の巻九の前半詠の中では、地理的關係はかなり緩やかに並んでいて、それは行程の順序よりも、歌の一連が景物やイメージの繋がりと、内面的な趣向を優先していることからすれば、ここで、「有間皇子」・「磐代」・「結び松」を通じた数首が歌われたとしても、それは一つの自然な流れであつたろう。仮に歌の場が同一の宴席の場であるならば、これらは間髪をおかず歌い継がれたか、場合によってはむしろ類同的な語句を積極的に用いて、集団の紐帯関係を活性化するような動態のなかで形成されたことを示していよう。

いま具体的な歌の場所（位置）を特定しようとするのではないが、巻二の歌群は、同じ場で制作された可能性が強いのではないかと思う。

もともと巻九歌群は、冒頭に斉明朝の行幸歌の少異歌を置くことから始まっている。

妹がため 我玉拾ふ 冲辺なる 玉寄せ持ち来 冲つ白波
(九・一六六五)

歌群の①（一六六七番）は左注にも説明しているように右の少異歌

有間皇子をめぐる歌群の形成と紀伊国行幸

である。かつての紀伊国行幸時の詠歌として、その往時を回想するために誦詠した古歌なのであろうから、同一の歌とみてよい。ここには斉明朝への追慕、ないしは有間皇子の時代への回顧の意識が働いていたといえる。

さらに、後半の復路（陸路）の旅の歌には、「藤白のみ坂」が歌われている。こうして、大宝時の歌群には、時として過去の紀伊行幸への回想、追慕の意識が表れている。さらに本稿が考察してきた歌群も、そのような列に並べて考えることができるのである。

巻二の追悼歌群の表現が臨場感に支えられたものであつたことが想起される。

結びにかえて

以上、巻二の有間皇子関係歌群について、巻二以外に収められる二回の紀伊国行幸における歌群との関係を手掛かりに、その形成の過程を探ってきた。万葉の歌によれば、二度の紀伊国行幸の機会に、有間皇子の自傷歌第一首に関わる「磐代」の「結び松」をキーワードとして、皇子追悼の歌が詠じ続けられた。巻二の有間皇子歌群はその主要な歌群を集積し、一つの流れに構成したものである。

持統天皇四年（六九〇年）の紀伊国行幸において、〈川嶋＝憶良歌〉が「浜松が枝」を軸にして有間皇子への追悼歌を歌つたのは、

齊明天皇四年（六五八年）の有間皇子事件から三十二年後のことである。さまざまに背景は推測されているが、謀反の大罪を犯した皇子に対する行為としては奇異な印象が持たれないでもない。この時の紀伊行幸の経緯がそのまま受け継がれたのかどうかは分からないが、それからさらに十一年後の大宝元年（七〇一年）の紀伊国行幸においても、有間皇子の自傷歌や事件を意識した場所、やはり皇子を追憶する歌が詠じられていた。本文でそれに関説することはしなかったが、意吉麻呂の歌の注記に、『類聚歌林』では詔に応へてこの歌を作る」とする実態を伝えているように、歌の場には天皇、あるいは持統太上天皇が臨席していた。とすれば、有間皇子に対する追悼の歌群は、公には許容されてあつたことになる。

持統四年と大宝元年の同じ天皇（持統および持統太上天皇）の兩次の行幸歌には、有間皇子追慕の思いが歌われているのである。数年にも互り、宮廷人に皇子への追悼、追憶の意識を持たせた要因は何なのか、これは単に行幸が有間皇子ゆかりの紀伊路を通過するからといった理由からだけではあるまい。先の考察によっても、有間皇子追慕の感情は集中的に表われており、宮廷集団の意思的動向が働いているとみられるからである。

持統・文武朝の両度の紀伊国行幸徒駕歌には、かなり意志的な有間皇子追慕の営みがあつたと確認して結びとしたい。

注

- ① 阪下圭八「有間皇子」『初期万葉』一九七八年、平凡社。初出、一九七五年。また穂積老の巻三・二八八とその異伝と思われる巻十三・三二四一歌も同じ表現をもつ。
- ② 稲岡耕二「有間皇子」『万葉集講座第五巻』一九七三年、有精堂。
- ③ 注②に同じ。
- ④ 注②に同じ。なお伊藤博『万葉集の表現と方法 下』一九七六年、塙書房。第八章第二節。
- ⑤ 吉永登『万葉集』（一九五七年、三一書房）護送の強行日程を指摘。仮託論の論拠のひとつとなる。
- ⑥ 折口信夫「万葉集短歌輪講」『折口信夫全集 二十九卷』一九六八年、中央公論社。初出、一九二〇年。
- ⑦ 伊藤博『万葉集の構造と成立 下』第八章第二節。一九七四年、塙書房。
- ⑧ 中西進「磐代にて」『山上憶良』河出書房新社、一九七三年。初出一九六九年。
- ⑨ 橋本達雄「人麻呂周辺の歌人」『万葉宮廷歌人の研究』一九七五年、笠間書院。初出一九六七年。中西、注⑧に同じ。
- ⑩ 『続日本紀』大宝二年六月乙丑（二十九日）条に、前年出航した遣唐使らが暴風に遭い戻っていたが、この日に筑紫から出港したと記している。
- ⑪ 伊藤博『万葉集の歌人と作品 上』第六章第二節。一九七五年、塙書房。三七五頁。
- ⑫ 同時の歌は巻一・五四―五六にも載せるが掲出は省略する。
- ⑬ 村瀬憲夫「岩代の追和歌」『紀伊万葉の研究』一九九五年、和泉書院。初出、一九七六年。

⑭ 田中大士「紀伊国行幸時の憶良歌」『セミナー万葉の歌人と作品 第五卷』二〇〇〇年九月、和泉書院。

⑮ 注⑭に同じ。

⑯ 阿蘇瑞枝『増補柿本人麻呂論考』一九九八年、おうふう、初版、一九七二年。金井清一「柿本人麻呂歌集非略体歌の作歌年代について」『国語と国文学』平成十年五月号、同『全注 卷九』概説。

⑰ 稲岡耕二『万葉表記論』第一篇（下）第四章。一九七六年、塙書房。初出、一九六九年。

⑱ 伊藤博『釈注 卷二』稲岡耕二『和歌文学大系万葉集①』補注一四六。

⑲ 村瀬憲夫『万葉集の歌——人と風土——〈和歌山〉』一九八六年、保育社。七一頁。

⑳ 注⑲に同じ、七二頁。ただし※印の歌（九・一六八）は「後れたる人の歌」の一首なので、場は同一でない可能性が高い。

㉑ これについても有間皇子との関係はないとの見解があるが、村田右富実氏によって、関係が明確にされた（『柿本人麻呂と和歌史』第四章第五節。二〇〇四年、和泉書院）。

㉒ 伊藤博『万葉集の歌群と配列 上』第五章第三節。一九九〇年、塙書房。初出、一九八八年。

㉓ 注㉒に同じ。四〇九頁。

㉔ 注㉒に同じ。四〇五頁。

〔付記〕 本稿は、森浩一先生に同行した御坊市での「御坊歴史再発見シンポジウム（二〇一二年十一月十日）」の資料をもとに整理したものである。与えられた課題は、万葉の紀伊関係の歌に有間皇子の事件がどのような影を落としているかであり、その一つに有間皇子関連の

歌群の形成過程を探ることがあった。御坊市の岩内一号墳を皇子の墓に想定する森浩一説（磐代と有間皇子）、森浩一編『万葉集の考古学』一九八四年。「敗者の古代史——有間皇子と塩屋連鯛魚——」『歴史読本』二〇一二年十二月号）を視野におきながら、万葉集に有間皇子の影を追う作業は難行であったが、有間皇子関連の歌が深い奥行きをもつことに、改めて気付かされた。

「もう一冊、万葉集を書きたい」との先生の願いの実現に、立ち合うことができなかつたのは心残りである。合掌。